

ふじの ようぞう
藤野 陽三 さん

東京大、横浜国立大名誉教授

6月6日、膀胱がん^{ぼうこうがん}で死去、76歳

東京・お台場のレインボーブリッジなど、国内外で巨大な橋の設計に携わった。人が歩くことで橋が揺れする未知の現象の仕組みを解明して抑制に成功するなど、生活を支える社会基盤の安全を守り続けた。

1980年代には、20世紀最大のプロジェクトと呼ばれた「本州四国連絡橋」事業などが進められた。82年に東京大「橋梁研究室」助教授となった藤野さんの元には、様々な研究依頼が舞い込み、神戸市と淡路島を結ぶ国内最長のつり橋「明石海峡大橋」(全長3911m)では模型を使った実験で風の影響を調べた。93年に完成したレインボーブリッジ(同798m)では耐風設計を担った。巨大な橋は、人と物の流れをつくるだけでなく、地域を象徴するランドマーク

揺れ抑え安全な橋 世界へ



設計に携わったバングラデシュのパドマ橋を訪れた藤野さん(2019年)＝篤子さん提供

となる。妻の篤子さん(69)は「大きな橋に関われたことを誇りに思っ、3人の子どもたちに『お父さんが造ったんだよ』とよく話していた」と振り返る。活躍の場は海外にも広が

った。英国・ロンドンで2000年、「ミレニアムブリッジ」が完成したときのことだ。エリザベス女王が出席した開通式の後、大勢の歩行者が渡り始めると想定外の横揺れが発生した。

華々しく開通した橋は直後に閉鎖された。

振動制御の専門家として英国に招かれた藤野さんは、歩行者の歩くタイミングがシンクロして橋の揺れが増幅していることを見抜いた。助言をもとにダンパーが設置され、約1年半後、無事に通行が再開された。恩師と慕う東大の長山智則教授(48)は「藤野さんはこの功績で一躍世界で知られるようになった」と語る。

インフラを支える技術者として、何より大事にしたのが安全だ。東日本大震災や能登半島地震などの大地震が発生すると現地向かい、壊れた橋や高速道を見て回った。25年に埼玉県八潮市で県道が陥没した際は、県の第三者委員会の委員長を務め、再発防止のため原因究明にあたった。

後進の指導にも力を注いだ。08年から毎年、米韓の研究者と土木工学を志す各国の大学院生約60人を集め、先端技術を学び合う3週間の「サマースクール」を開いた。長山さんは「若い人が育つのを本当に楽しみにしていた。著名な研究者が何人もここから輩出された」と話す。

20年にはスポーツが盛んな城西大(埼玉県坂戸市)の学長に就任。箱根駅伝や大学野球の応援に駆けつけた。学長室長として支えた緒方登志也さん(65)は「磁石のように人を引きつける人だった」と懐かしむ。

来年開く「しのぶ会」の案内は2000人以上に送る。「人と人を橋渡しする専門家」を自任した土木技術者は、いつも笑顔の中心にいた。

(科学部 山路草太)

追悼抄

※「追悼抄」は、来月から原則火曜の朝刊社会面で掲載します。